

ミシシッピのジョン・パーキンズ
ウガンダのエマニュエル・ワマラ 枢機卿
そして、
日毎にわたしたちに道を示してくれる聖徒たちに
本書をささげる

**Reconciling
ALL THINGS**
A Christian Vision for Justice, Peace and Healing

Published by InterVarsity Press
Copyright © 2008
by Emmanuel Katongole and Chris Rice

Japanese Edition Copyright © 2019
Translated by Permission of
InterVarsity Press
tr. by
SATO Yoko
HIRANO Katsuki

Published by
The Board of Publications
The United Church of Christ in Japan
Tokyo, Japan

日本語版への序文

クリス・ライス

あなたにとって「わたしたち」とはだれのことですか？ あなたが「わたしたち」と口にするとき、そこにだれが含まれていますか？ あなたの仲間とは、いつたいだれのことですか？ これら「わたしたち」という言葉をめぐる問いは、すべての人が向き合わなければならない最も重要な問いの一つであり、本書の中心にもこの問いがあります。

わたしたちは、「わたしたち」と「彼ら」が対立する世界の中で生きています。わたしたちの家、わたしたちの民族、わたしたちの家族。これらの「わたしたち」が力をふるっています。わたしたちが好ましく思い、仲間に加えたいと思う人たちがおり、そしてまた、わたしたちが好ましく思わず、排除したいと思う人たちがいます。

キリスト者にとって、いちばん最初にくる「わたしたち」とはいつたいだれのことでしょうか。主イエスは使徒言行録の冒頭で、この問いにかかわることを語っておられます。主イエスはエルサレムでご自分の弟子たちに言われます。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、

わたしの証人となる」(使徒1・8)。ここで主イエスは、ご自分の弟子たちがエルサレムから見知らぬ土地、見知らぬ人びとのただ中に聖霊によって遣わされる運命にあることを宣言しています。使徒言行録は、それに続いて——ユダヤ人と異邦人、男と女、富める人と貧しい人が一緒になって、様々な文化をもつ人々からなる多言語の新しいコミュニティをつくりあげながら——見知らぬ土地が聖なる土地になっていくことを語ります。神は教会に「新しいわたしたち」(New We)を与えてくださるのです。そして今、このわたしたちの時代にも、教会に「新しいわたしたち」を与えようとしておられます——国家と国家、集団と集団、文化と文化、過去の痛みや不正義によって分裂した、人と人とのあいだの分断を食い止めようと模索する「新しいわたしたち」を——。

ここに「和解の神学」の出発点があります。このような神学は非常に重要です。なぜならわたしたちはみな、紛争と恨みと分断の物語と無縁ではないからです。そしてこれらの物語が人びとを毒しています。朝鮮・韓国と日本のあいだには激動の歴史があり、その歴史にわたしもまた毒されてきました。

わたしは韓国で育ちました。両親が長老教会の宣教師として、韓国で一六年間働いていたのです。わたしは韓国が日本に苦しめられてきた話をたくさん聞きました。年輩の韓国人からは、日本語を学ぶように強要された話、強制的に日本名をつけられた話、神社での参拝を強いられた話を聞かされました。そうしてわたしは日本を心底嫌いになり、それは大人になっても変わりませんでした。

わたしは長年、アメリカの人種間の和解のリーダーを務めてきましたが、わたしが「わたしたち」と言うとき、そこに日本人は含まれていませんでした。わたしの子どもたちは、わたしが日本人を馬鹿にするのをたびたび耳にしていました。子どもたちは尋ねました。「おとうさん、どうしてそんなに日本人が嫌いなのです?」

二〇〇三年、わたしがデューク大学神学部大学院で学んでいたときのことです。ある日、クラスの中に一人のアジア系学生がいることに気がつきました。わたしと同じように年のいった学生です。授業のあと、わたしは自己紹介をしました。その学生の名前を知ったとき、わたしはがっかりしました。カツキ・ヒラノ。日本人。カツキは、研究休暇を利用して家族と共に滞在していて、数か月間デュークで学ぶ予定だということです。もしもカツキが韓国人だったなら、わたしは大喜びですぐに彼を家に招き、家族と夕食を共にしていたでしょう。けれどもわたしは、また会いましょう、とは言いませんでした。カツキとの会話は五分で終わり、その後、わたしがカツキのことを考えることもありませんでした。

一〇年後、わたしはデュークの「和解センター」の所長となっていました。わたしたちはあなたが今手に取っているこの本を出版し、和解をテーマとするシリーズの刊行を始めました。わたしたちがアメリカで始めた和解フォーラムは大きな成果をおさめ、次にアフリカでもフォーラムを開始しました。そしてわたしたちは、次の連携地域として北東アジアに目を向けるようになりました。

となれば、中国と韓国と日本に行ってみなければなりません。けれども日本では、わたしを迎えて案内してくれそうな人をだれも知りませんでした。わたしはデュークの「夏期和解フォーラム」でヨーコ・サトウという日本人作曲家と知り合いになっていたので、彼女にだれかを推薦してもらうことにしました。

「適任と思われる人が一人いますよ」とヨーコは言いました。「東京にいる平野克己という牧師です。あなたのことを紹介してあげましょうか？」

そうです、わたしは日本に行きました。そうです、わたしは空港で出迎えてもらいました。カッキ・ヒラノ牧師に。それから五日かけて、わたしたちは東京と長崎をまわりました。カッキはわたしを日本の文化と食べ物に出会わせてくれました。マイノリティーとして信仰生活を送っている日本のキリスト者たちに、わたしを紹介してくれました。長崎では、わたしはアメリカによって原子爆弾が投下された浦上天主堂の前に立ちました。わたしは、自分のパスポートを発行した国を赦してくださるよう、神に祈りました。過酷な迫害のなか、七世代にわたって信仰を貫いた潜伏キリシタンの物語も学びました。わたしは自分が変えられたことに衝撃を受けました。いつたいどうすればこんなことが可能だったのでしょうか？ 日本での滞在はともすてきだったなどと、韓国人の友人たちにどうやって話すことができるでしょうか？ このカッキという名のキリストにある兄弟との交流を、わたしはどれほど楽しんだか、ということ。

カッキがアメリカに来たとき、わたしは彼と五分しかいっしょに過ごしませんでした。わたしは日本に行ったとき、カッキはわたしと五日間いっしょに過ごしてくれました。これはわたしにとって、悔い改めと癒やしの旅の始まりでした。数年後、カッキが二度目の研究休暇で再びデュークにやって来たとき、妻ダナとわたしは彼をホテルに滞在させておくわけにはいかないと思いました。わたしたちはカッキを呼んで二か月間わたしの家で生活を共にし、カッキがアメリカで「ホームステイ体験」をするうちに、わたしたちの絆は深まっていきました（ダナの手料理の数々が、わたしのかつての不親切さの償いになったらいいのですが）。

二〇一一年以後、カッキとわたしは他のキリスト者リーダーたちと共に「北東アジア・キリスト者和解フォーラム」という新しい運動に携わるようになりました。そこでは、中国、韓国、日本、台湾、アメリカのキリスト者リーダーたちが、この不穏と激動の時代に平和へと向かう神の道を見出そうと模索しています。

わたしたちは毎年、当該地域の異なる国で集まっています。二〇一五年には五〇人が長崎に集まり、六日間滞在しました。学者、実践家、牧師と神父、教会のリーダーなどの老若男女の参加者には、プロテスタントもカトリックもいます。わたしたちは聖書を深く読みました。共に礼拝をしました。互いの緊張や激しい議論も起こりました。そして、食事を共にしました。分断を超えて共に食事をすることはとても大切なのです。ルワンダには「食事をしている口の音が聞こえないなら泣

いている口の音も聞こえない」ということわざがあります。それは気楽な六日間ではありませんでした。波乱がありました。ある有名な中国人のリーダーは、その苦痛に満ちた歴史ゆえに、日本に来たことがあります。しかし、彼はやって来たのです。

和解フォーラムでは毎年、「巡礼」と呼ぶ日を設けています。その地に住む人たちの痛みと希望の物語にふれるために、その地を歩くのです。長崎でのフォーラムで大きな転換点となったのは、わたしたちが市内に出かけた日でした。わたしたちはアメリカの原子爆弾が投下された場所に行きました。殉教の地にも行きました。どちらも長崎でよく知られている場所です。

しかしわたしたちは、殉教の丘から少し歩いたところにある資料館にも行きました。「岡まきはる記念長崎平和資料館」のこと。人目につかないところにひっそりと建っている、小さな資料館です。そこでは、たくさんの痛ましい写真や資料を通して、日本軍が朝鮮や韓国に対して行った残虐行為の物語が語られていました。わたしは心配になりました。「わたしたちのグループにいったいここで何が起こるだろう？」

だがこの資料館を設立したかを知って、わたしたちは驚きました。牧師です。しかも、日本のわたしたちはいつしよに資料館の中を歩いていきました。横に並んで、痛ましい写真を眺め、説明書きを読んでいきました。朝鮮人慰安婦。南京大虐殺。フォーラムの期間中に韓国人たちが日本人について文句を言っているのを、わたしは耳にしていました。「日本人はもっと謝罪すべきだ」。け

れども、この資料館を訪問すべきだと主張したのは、フォーラムの日本人リーダーたちだったので。また、フォーラムの期間中に中国人のある兄弟は、一九四五年の原爆の長崎投下は中国ではまさに朗報であったと言っていました。「あの爆弾のおかげでわたしたちは日本から解放されたのだ。南京大虐殺の復讐だよ」。ところがこの資料館で、わたしは中国の兄弟姉妹たちが日本の兄弟姉妹たちと抱き合っているのを見たのです。フォーラムの期間中、日本人が韓国人について文句を言っているのも、わたしは聞きました。「あの人たちを満足させることなどできない。赦してもらえないまで、いつたいどれだけ待たばいいんだ」。しかしわたしは、韓国のキリスト教の主要なリーダーが、日本の教会の主要なリーダーに近づいていくのを見ました。その韓国人は言いました。「わたしたちはこのようなことが再び起きないようにしなければなりません」。ふたりは抱き合い、涙を流しました。

わたしたちは、このようなことが再び起きないようにしなければなりません。わたしたちは、「新しいわたしたち」(New We)は、資料館でのあの「巡礼」の中で、見知らぬ土地が聖なる土地になったのです。

過去の不正義を正すためには、国家の謝罪と真実の歴史が必要とされます。そしてわたしは、わたしの仲間である日本人たちがこのフォーラムで謝罪するのを、何度も耳にしました。しかし使徒言行録の物語では、もっと豊かな神のビジョンが語られています。悔い改めをまつとうするとは、

共に生きることなのです。悔い改めとしての共に生きる生活。わたしのことを言えば、わたしには日本からできる限り遠く離れた所にいたいと思っていた時代がありました。これほど長い年月、わたしは貧しくされ、ちつぽけな者にされていたのです。今では日本なしの人生など想像できません。カツキや、知り合うことのできた日本の兄弟姉妹たちがいなくなったら、わたしはどんな人間になっていたことでしょうか。彼らは和解の旅の仲間になってくれたのです（その中にはヨーコ・サトウも含まれます。彼女はカツキを最初にわたしに紹介し、今回はカツキといっしょにこの本を日本語に訳してくれました）。また、フォーラムで出会った日本人たちも、韓国や中国の思いもよらない新しい旅の仲間たちがいなくなったら、いつたいどうなっていたことでしょうか。今も残る対立や傷を、自分の国で、そして相手の国とのあいだで語っていくことが、今や共通の仕事となりました。

このようなわけで、本書は世界各地の教会と同様、日本の教会とも深く関わっているのです。神の「新しいわたしたち」(New We)を押しつけるとき、わたしたちは貧しくされ、ちつぽけな者にされてしまいます。けれども神の「新しいわたしたち」(New We)のコミュニティーの中で、わたしたちはさらに美しい現実を経験することができます。聖霊の結ぶ実をさらに味わうことができます。地の果てにまで広がる神の愛に、さらに満たされていくのです。

わたしは祈っています。本書を読むことで、あなたが新しい仲間たちといっしょに、神と共に行く冒険の道へと、さらに導かれていきますように、と。

おわりに

日本語版への序文 クリス・ライス 3

はじめに 13

- 第1章 一般に流布している和解のヴィジョン 27
 - 第2章 一歩さがってみる——神の物語のゴールとしての和解 53
 - 第3章 和解とは神と共に行く旅 65
 - 第4章 聖書はどのようにわたしたちをつくり変えるのか 80
 - 第5章 嘆きの訓練 105
 - 第6章 壊れた世界における希望 133
 - 第7章 なぜ和解に教会が必要なのか 152
 - 第8章 リーダーシップ——心、精神、人生スピリット 171
- おわりに——長い期間にわたる旅 199

神の使命として和解を回復する——10のテーマ iii

文献案内 i

訳者あとがき 平野克己